
 論 説

順天堂大学保健看護学部 順天堂大学保健看護研究 3
P.52-61 (2015)

発達心理学の観点から見た「赤毛のアン」の成長の妥当性

Validity of the Growth of “Anne of Green Gables” from Viewpoint of Developmental Psychology

山 岸 明 子*
YAMAGISHI Akiko

要 旨

本研究の目的は「赤毛のアン」の主人公が、孤児として不遇な子ども時代を過ごし、不利な状況にあったにもかかわらず、賢く愛情豊かな女性に成長したことについて、発達心理学の観点からその妥当性を検討することである。幼少期に孤児となり誰からも愛されたことがなかったアンは、11才の時にクスパート家に来るが、それまでのアンの育ち、クスパート家に来た当初のアンの様子、その後のアンの変化に関して書かれていることを発達心理学の観点から検討した。その結果 1) アンは愛着対象をもったことがなく、その育ちは愛着障害を引き起こすようなものであったが、「拡散された愛着」に該当するような傾向がいくらか見られたが、「回避性」の問題は見られなかった。2) アンはマリラとマシユウから暖かい養育としっかりしたしつけを受け、期待・応援されることにより、またダイアナとの親密な親友関係や、学校の仲間、近隣の人々との交流によって心豊かに成長していった。3) アンが当初からもっていた対人的能力や学業上の能力に関しては、語られた育ち方では少々無理があるが、クスパート家にきてからのアンの変化に関しては、発達心理学の見解と一致していた。

索引用語：愛着、孤児、愛着障害、発達心理学、「赤毛のアン」

Key words : attachment, orphan, attachment disorder, developmental psychology,
“Anne of Green Gables”

1. はじめに

1. 「赤毛のアン」の人気と孤児物語

モンゴメリの小説「赤毛のアン」(1908年)¹⁾は日本では1952年に翻訳書が発刊され、その時から現在に至るまで大変人気がある小説である。小倉(2004-初出は1991年5月～1993年1月に雑誌に連載)²⁾によれば、1954年の調査開始以来「学校読書調査」において中学生女子では「1ヶ月に読んだ本」の上位

にずっと入っていたとある(筆者も中学時代に一番好きな愛読書であった)。最近では児童書よりもマスコミで話題になった一般向けの本が上位に入っているが³⁾、小・中・高校生によく読まれる本であり続けているし、大人になっても繰り返し読む者も多い(佐藤 2010)⁴⁾。ミュージカルやテレビアニメになり、2014年前半のNHKの連続テレビ小説「花子とアン」は翻訳者が主人公であった。

なぜ「赤毛のアン」は人気があるのだろうか。

19世紀末から20世紀はじめの英語圏の少女小説は日本でもよく読まれているが、主人公が孤児であ

* (元) 順天堂大学

* (before) Juntendo University

(Nov. 14, 2014 原稿受付) (Jan. 16, 2015 原稿受領)

るものが多い(表1に主人公が孤児である少女小説を年代順にあげた)。その理由として1.孤児が多い時代だったこと、2.孤児という不運な状況は物語の劇的展開を可能にし、転落・没落からの回復のテーマが可能なこと、3.親の不在はヒロインの個性的なパーソナリティを可能にすること等があげられている(斎藤, 2001, 藤井, 2009)⁵⁾⁶⁾。多くの孤児物語は、不運な状況からの立ち直りの物語である点で共通しており、立ち直ることを助けてくれる人、きっかけをくれる人、不運な状況を更に強める人等様々な人と出会い、やがて幸せになるというパターンが多く、「赤毛のアン」もそれに合致する小説である。

その中でも「赤毛のアン」が特に人気がある理由については色々なところで論ぜられている²⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾が、主として次のことがあげられる。まず想像力豊かなアンのおしゃべりや彼女が引き起こす出来事の面白さ、つらい状況を想像力で乗り越える姿に惹かれること。想像好きで一風変わっている少女は、他の少

女小説でも見られるが、アンは特に魅力的なキャラクターの持ち主である(マーク・トウェインは『不思議な国のアリス』以来の最も強く人の心にふれてくる存在である』と言っている)⁹⁾。しかもヒロインはかわいい容貌のことが多いのに対し、アンは「赤毛で、そばかすだらけ、やせっぽち」で、そのことをいつも気にし強い劣等感をもっていること、そして欠点だらけの少女であることが読者にとっては身近に感じられるのだろう。また親友のダイアナや後に恋愛の相手になるギルバートへの思い等、思春期の心理がうまく描かれていること、更に女性の社会進出がむずかしい時代(出版は1908年)にもかかわらず、アンは少女っぽさをもちつつ男の子に負けずに勉学に励み、そして様々な事件を引き起こし失敗を重ねながら、賢く魅力的な女性に成長していくことも人気の要因と考えられる。

2. 孤児の問題と発達心理学

社会全体が貧しく医学も発達していない時代は、親が早く亡くなることも多く、孤児はたくさんいたと思われるが、孤児が心理学において取り上げられる様になったのは、20世紀初め欧米の小児科医らによって、ホスピタリズム(施設病)が指摘されるようになってからである。乳児院や孤児院等の施設で育つ乳幼児の死亡率や罹患率が高いことが指摘され、その原因は栄養や衛生上の問題だけではなく、保母の数が少ないことが関与していることが明らかされた。そしてその問題の中心も身体的なものから発達遅滞(知的発達、社会的、言語的、情緒的発達の遅滞)や無気力へと移っていった¹⁰⁾。

その後スピッツは施設の子が母親から離される時に陥る状態についての研究を行い、第二次世界大戦時に家庭から引き離された子どもたちの発育についてアンナ・フロイトらが報告書をまとめている。いずれも幼少期の母親との接触の重要性を示すものだが、ボウルヴィは家庭のない子どもの精神衛生面に

表1 19世紀から20世紀はじめに英語圏で書かれた孤児少女小説

書名	発行年	孤児になった年齢と状況	母・父
アルプスの少女ハイジ	1881	生後すぐ父死亡 母もショックで発病、2-3週後死亡 祖母・伯母の元へ 5才山小屋の祖父の元へ。8才伯母の意向で裕福な家へ。その後祖父の元へ	×・× ^{<注1>}
家なき子	1893	12才で父死亡 母親とインドからフランスへ 母死亡(13才) 祖父の元へ	△・△
少女レベッカ	1903	1-12才 父死亡 伯母の元へ	○・△
小公女	1905	母親出産時に死亡 7才インドから帰国 寄宿学校に入るが父死亡	×・△
赤毛のアン	1908	生後3ヶ月で母死亡 4日後父も死去 近隣の夫人に引き取られる 8才で別の夫人の元へ その後孤児院に4ヶ月いて、11才でクスパート家へ	×・×
秘密の花園	1911	9才両親死去 叔父の元へ	△・△
足長おじさん	1912	捨て子 孤児院で育つ 資産家に見込まれ大学へ	×・×
ポリアンヌ	1913	母死去 牧師の父と暮らす 11才父死去 母の妹の元へ	×・△
(モンゴメリ) ^{<注2>}	(1874~1942)	21ヶ月母死去 母方祖母(厳しい)の元へ 父再婚し、しばらく共に住むが継母とうまくいかず、祖母の元に戻る	×・○

<注1> ×: 幼少期に死去 △: 学童期に死去 ○: 健在
<注2> 参考に「赤毛のアン」の著者を加えた。

ついでの研究を1951年にまとめ、施設児の問題は施設そのものの問題ではなく、母性的な養育を受けられないことにあるとして”maternal deprivation”（母性剥奪）という概念を提唱した¹¹⁾。更に子どもは生存のために養育者に近接していることを求め愛着行動をとること、また子どもの正常な精神的発達のためには特定の養育者との緊密な関係を維持することが必要であるとする愛着理論を構築した¹¹⁾。

幼少の子どもにとって愛着対象のもつ意味は大きく、それを失うことは大きな危機である。但しはじめの内はまだ愛着対象は定まっておらず（無差別的愛着行動）、繰り返し養育者からの世話を受ける中で徐々に愛着対象が特定されていく。愛着対象が特定され、特殊的愛着行動が形成されると、母子分離の打撃は大きくなるとされる。但し複数の愛着対象がいてその人が補完してくれたり、あるいは新しく他の愛着対象を得ることで、安定感を回復することは可能である。一方母子分離がなくても、愛着形成がなかったり愛着が歪んでいる場合は、愛着障害等の問題が生じる。

エリクソンも同様に、乳児期に養育者から親身な世話を受けることが自我発達の基盤になるとする自我発達理論を提唱した¹²⁾。第1段階にあたる乳児期に養育者から親身な世話を受けて、自分の欲求を満たしてもらう中で、乳児は養育者への信頼、養育者が属する世界全体、養育者や世界から応じてもらえる自分自身への信頼（＝基本的信頼）をもつようになるとされる。そしてその時期にそのような信頼できる対象をもてないことは人格の基底部分に問題をもたらすことになる。

発達初期の経験は特に重要なことが示されているが、人間は可塑性が高く、幼少期にある程度の問題があっても、その後の環境や経験が適切であれば回復することも可能なことも示されている。しかし愛着に関しては幼少期に大きな問題があった場合、その

障害からの回復はかなりむずかしいことが報告されている。例えば1989年ルーマニアのチャウシェスク独裁政権崩壊時に多くの施設が劣悪な状況であることが判明し、多くの施設児が外国に養子にだされたが、よい環境を提供されても障害の克服はむずかしく、施設での生活が長かった者ほどその傾向が強かったことが報告されている(Chisholm,1998, 遠藤,2013)¹³⁾¹⁴⁾。

本稿では「赤毛のアン」が孤児として不遇な子ども時代を過ごし、不利な状況にあったにもかかわらず、賢く愛情豊かな女性に成長したことに着目し、その過程がどのように描かれているのか、発達心理学の知見と一致しているか、発達心理学の観点から無理はないかを検討する。現在幼少期の愛着形成における問題に由来する愛着障害が注目されているが、孤児アンの成長過程を辿り発達心理学の観点から検討を行うことは、フィクションの小説ではあるが、幼少期の愛着形成において問題がある者の回復の過程やそこに寄与する要因を考える上で参考になると思われる。

II. アンの育ち

11才のアンが、農作業の手伝いをする男の子を望んでいたクスパート家の老兄妹のところに手違いでやってくるころから物語は始まる。孤児院ではなく、やっと自分の家ができる胸はずませていたアンは絶望するが、アンのおしゃべりが気に入ったマシュウのお陰で追い返されずに一緒に住むことになる。そして子どもを育てたことのないマシュウとマリラに愛され、本当の家族のようになっていく。

アンは自分の身の上について、マリラに次のように語っている。生後3ヶ月で母親は熱病で死去、感染した父親もその4日後に死去。父母は共に高校教師だった。親戚もなく引き取り手がいなかったため、近所に住むトマス小母さんがひきとってくれることになる。トマス家は貧しく小父さんは酒のみという家

庭であった。アンは小母さんの四人の子どもの世話を
して、疲れてお祈りどころではなかったし、学校へも
ほとんど行けなかった。アンが8才の時小父さんは
事故で死亡。その後8人の子どものもつハモンドさ
んが、子どもの扱いに慣れているアンを引き取る。双
子が3組もいる家庭で2年間暮らす。夫が死亡すると、
ハモンドさんは子どもを預けてUSAへ行ってしま
う。アンはその後4ヶ月孤児院で暮らす。

「誰も私をほしがる人はいなかったのよ。それが私
の運命らしいわ」とアンは言っているが、いつも引
き取り手はおらず、誰からも愛されたことがない少
女である。トマス小母さんは貧困と酒飲み亭主で生
活に疲れ、イライラしていたのだろう。アンは赤毛
を気にしているのに「神様がわざと赤くした」と傷
つくことを言われたり、「牛乳で育てたのにどうして
そんなにわるさをするのか」「あんたは手のつけられ
ない悪い子だ」と叱られたとアンは言っている（叱
られることに慣れている」とも言っている）。

たとえ3ヶ月まで実母に愛されていたとしても、
その記憶は全くないし、まだ愛着は形成されていな
い時期であり、愛着対象をもったことはないと思わ
れる。ものごころついてからは、小間使い兼子守と
してこきつかわれるだけで、誰からも愛されず、やさ
しく扱われることもない11年間を過ごしている。満
たされない思いをアンは想像の世界でのみ充足させ
ていた。2件の家でそれぞれ想像の友人を作って語り
かけていたという。

そのようなアンの育ちを考えると「自分は誰からも
愛されず必要とされず、他者は自分を受入れてくれ
ないし信頼できない」という対人的枠組みをもつよ
うになっていると考えられる。親密な関係をもてな
い、あるいは関係性が歪んでしまっているような愛
着の障害が予想される。基本的信頼に関しても、養
育者は自分に応えてくれないし、世界も応えてくれ
ず、そのように応えてもらえない自分にも信頼感を

もてず基本的不信を獲得していると考えられる。

表1に示した他のヒロインと比べても、両親を早
い時期に失い、その後も愛着対象をもったこともなく
(両親を早い時期に失っている「アルプスの少女ハイ
ジ」は親戚や知り合いに預けられ、ある程度のケア
は与えられている)、愛着に関する問題は大きいと思
われる。

III. グリーン・ゲープルスにきた頃のアン

Iで述べたようにアンは魅力的なところがある少
女だが、愛着対象をもたず、誰からも愛されなかつ
たため、愛着に関する障害があることが予想される。
モンゴメリは必ずしも否定的なものとして書いてい
ない場合もあるが、グリーン・ゲープルスにきた頃
のアンには行動的・心理的に様々な問題がある。

1) 感情のコントロールができず、特に怒りのコン
ロールができない。レイチェル夫人に赤毛のことを
言われて激昂するし、ギルバートを石版でなぐる有
名な事件も赤毛をからかわれたことが原因で、怒り
にかられて大騒ぎをひきおこしている。

2) よく知らない人に対するなれなれしい態度がみ
られる。これはDSM-IVの愛着障害の診断基準の「拡
散された愛着」に該当すると思われる。「適切に選択
的な愛着を示す能力の著しい欠如を伴う無分別な社
交性という形で明らかになる。例：あまりよく知ら
ない人に対しての過度のなれなれしさ」である¹⁴⁾。ア
ンは迎えにきたマシュウにべらべらしゃべり続ける
が、初対面の人に対してとは思えない馴れ馴れ
しく親しげな口調である。マリラにも「まったくよ
くもあんなにしゃべるものだ」と言われるほどよく
しゃべる。ダイアナと腹心の友になるが、初対面
でろくに話もしない内にそのことを切り出している。友
人をもっていなかったアンにとっては誰でもよかつ
たのであろうが、無差別に親密性（それも最大限の
親密性）を向けている。

3) 大げさな言い方—それがアンの魅力でもあるのだが、アンのおしゃべりは想像も加わっていて大げさだし、喜び方や謝り方も大げさで演技的と言える位である。例えばピクニックにもっていくものを作ってくれると言うマリラにその嬉しさを伝えるのに「まあ!」「まあ!」と感嘆詞を連発する。ダイアナと腹心の友になる時の誓いのことば(遊びではあるが)やダイアナを失うことへの思い(「ダイアナがお嫁にいて私をひとりぼっちにしたらどうしたらいいかしら」と泣く)も過剰である。マシュウがクリスマスにふくらんだ袖の洋服をプレゼントしてくれた時の喜び方も—但しその喜ぶ姿を見てマシュウやマリラは嬉しそうだし、読者もほほえましく感じるのだが—大げさである。なお演技は遊びとして意識的にやっている面もある。レイチェル夫人に謝りたくないアンは、演技することで楽しく謝ってしまうのである。

4) 一方自己評価は極めて低い。強い劣等感をもち、誰にも愛されない、誰からも望まれないと何度も言っている(例えば「愛している」というダイアナに「私みたいな者が愛されるなんて考えられなかった」と驚いて感激している)。そして自分は哀れな孤児だという意識を強くもっていて、「この哀れな孤児に〜」「もし小母さんが哀れな孤児だったら〜」というような台詞も多い。自分が置かれた悲惨な状況を想像させ、同情を買うという方法がしばしば取られている。

5) 嘘をつく。取っていないのに、ピクニックに行きたいがために相手に合わせてお話を作り、嘘の告白をする。アンにとっては目標達成が重要で、嘘をつくことが悪いとは思っていない。誰も守ってくれないし味方もしてくれないので、そのようにして目標達成を目指さざるをえなかったのだと思われる。

そのような問題が見られるが、一方で他者と関係を持つとしない、あるいはそれがむずかしいというDSM-IVの愛着障害の診断基準の「回避性」の傾向¹⁵⁾はもっておらず、他者との関係性は基本的にうま

くいつている。アンは誰からも愛されないと考えていて対人的に自信はないにもかかわらず、よい関係を作る力をもっている。男の子を望んでいたマシュウとマリラの気持ちを変えて引き取ることにさせてしまうし、気むずかしいバーリー夫人にもダイアナと遊ぶことを許されるし、ダイアナも「あんたって変わってるわね。でも私、本当にあんたのことが好きになりそうよ」と言って、腹心の友になることを約束してくれる。ひどく怒らせたレイチェル夫人やミス・バーリーの気持ちを大きく変えてしまう。なぜこんなにすぐに廻りの人とよい関係を結べるのか? そのためにはそれまでにより関係を経験し安定した対人的枠組み、あるいは「自分は今うまくやれている」という自己効力感のような気持ちをもっていること、そしてその中でよい関係を作るスキルを身につけていることも必要と思われる。

また学校にほとんど行っておらず、小さな子の世話をするだけで、想像の友人しかもったことがないのに、アンは学校でもすぐに適応する。孤児だからと言っていじめられたりしないし、ちょっと変わっていることも認められて、仲間に入れてもらっている。このようなことが同年齢の友人を全くもっていなかったアンに可能なのか、発達心理学的には少々疑問である。更に問題は少し違うが、学校にほとんど行かず、日々子守に追われていたのに、学校での勉強にも問題はなく、優秀であるというあたりにも、無理があるように思われる。

IV. その後のアンの成長

アンは11才まで愛情を受けずしつけも満足に受けていなかったが、優しいマシュウと厳しいが愛情をもって育ててくれるマリラのもとで、大きく変わっていく。内気・無口で女の子が苦手なマシュウなのだが、彼はすっかりアンのことが気にいってしまい、いつもアンに優しく、彼女の願いをそれとなく叶えてくれ

る。アンを引き取りたくなかったマリラは、感情を外にださない堅い女性で、アンをしっかりと育てようとして厳しく接するが、アンと言動に接している内にだんだん気持ちほぐれていく。マシュウのように直接的に可愛がるのではないが、いつもアンを暖かく見守ってくれる。誰からも愛されなかったアンは、二人からの確かな愛に包まれて、安全基地と安全感を得る(アンは「家へ帰るって嬉しいものね」と嬉しそうに言っている)。そしてマリラからきちんとした生活の仕方を教わり、そのしつけに素直に従って社会化されていく。荒れた気持ちを宥め慰めてくれる他者を得て、徐々にかんしゃくをおこすこともなく穏やかな少女になっていく。

近隣の人も友人も、孤児であり、かんしゃくもちで変わったところのあるアンを受入れてくれ、学校でもアンはのびのびと個性を發揮して友人との生活を楽しむ。この小説には善人しかでてこないという批判があるが²⁾、必ずしも善人ばかりとはいえないとしても、孤児であることでアンに偏見をもったりする者はいない。小さな町で近所に友だちがいないことが、ダイアナと遊ばせてくれる要因になり、ダイアナの母親を怒らせる事件も起こすが何とか許してもらっている。ダイアナとはいつも一緒にいて、楽しい時を過ごし、時に慰め合い、腹心の友になる。ギルバートとは石版事件以来、口もきかない仲になるが、ライバルとして意識し、密かに恋愛感情をもつようになる。

かんしゃくをおこしたり、問題をひきおこしてばかりいたアンだが、3年後にはレイチェル夫人に「すっかりよい子になった」と言われている。自分が赤毛であることをあれだけ嫌がり、自分が違う容貌であることを想像して自分を慰めていたアンは、「私は自分のほか、誰にもなりたくないわ」というようになる。マシュウから真珠の首飾りをプレゼントされたアンは、「たとえダイヤモンドでなくても真珠の首飾りを

つけたグリーン・ゲープルススのアンで大満足だわ」とマシュウに感謝すると共に、今の自分を肯定するようになる。強い劣等感をもち、誰にも愛されない哀れな孤児という自己概念は大きく変わっている。

アンは音楽会では素晴らしい朗読をし、またギルバートに負けまいと頑張って勉強し、卒業式ではエイヴリーの奨学金をとって表彰される。その日、「私が男の子だったら小父さんを楽にさせてあげられたのに」というアンに、マシュウは「わしには12人の男の子よりお前一人のほうがいいよ」と言う。「エイヴリーの奨学金をとったのは、女の子だったじゃないか。わしの自慢の娘じゃないか」アンへの最大の賞賛の言葉を残して、その翌日マシュウは亡くなってしまふ…。

アンは目が悪くなったマリラのために、大学への進学を延ばして、マリラの世話をしながら小学校の教師になることに決めるところで一巻は終わる。なおアンのものでその後については、10巻まで続くアン・シリーズに書かれている。アンは大学に進むが、その後ギルバートと結婚して家庭にはいり、円満な家庭を築く。結局当時の良妻賢母になってしまうことに落胆する声は多く²⁾⁵⁾、モンゴメリ自身も出版社からの要請で嫌々書き続けたにすぎないとのことである¹⁶⁾。

V. アンの変化に寄与したもの

不遇な状況で育ち劣等感でいっぱいだったアンが、自信に満ちた愛情豊かな女性になることに寄与した要因をまとめると以下のことがあげられる。

1) 暖かくしっかりとした養育

愛情に飢え、この世界に居場所がなかったアンに、マシュウとマリラははじめての居場所を与えてくれた。彼らは暖かい養育者となり、いつも側にいて変わらずにに応じてくれ、どんな時も応援し見守ることによって、アンに安定感・安心感を与えてくれた。また失敗ばかりし、悲観したり絶望したりするアン

持ちを落ち着かせ、励ましてくれた。一方マリラのしつけは厳しいが、そのお陰で堅実な生活の仕方と生活のスキルを身につけることができ、アンは社会化された少女になっていく。そして生活に枠をつくるのが欲求のコントロールの機会になり、またマッシュウやマリラに気持ちを宥めてもらうことが、自ら自分の気持ちをコントロールすることにつながっていく。

2) 学習の機会と動機づけの提供

更に二人はアンがもつ能力を更に伸ばす動機づけも引き起こしている。もともと知的に優れていたが、二人の応援や期待はアンが頑張り続ける元になっている。女性の社会進出がむずかしい時代に、二人は女の子であっても高い教育を受けさせたいと思って応援していた。アンは当初は「賢さ・美しさ・善良さ」の中で躊躇なく美しさを選ぶと言っていたが、二人の期待に応えようと一生懸命勉強し、知性と教養を身につけていく。また新任の担任教師ミス・ステイシーもアンがやる気を引き起こし、成長を促している。

3) よい友人関係

よい友人関係をもてたことも変化の大きな要因であろう。ダイアナとの間に親友関係＝chumをもつことができたことは、サリバンが言うように、それまでのゆがみの修正にも思春期の発達にも寄与したと考えられる¹⁷⁾。ダイアナと様々な経験を共有し、共感して慰め合う中で、安定感と自他への信頼感を培っていく一方、自分とはかなり異なるダイアナとの交流は自分らしさの構築にも役立ったと思われる。ギルバートの存在はアンを頑張らせる源になっている。IVで、アンが学校で多くの友人と良好な友人関係をもつのは、同年齢の友人を全く持っていなかったことを考えるとむずかしいとのべたが、知的能力や明るく活発な気質をもっていることや子守りの経験が豊富なことが、他者を楽しませたり楽しい遊びを提案することにつながったのかもしれない。

4) 地域の大人とのかかわり

変わった行動をし、たくさんの失敗をするアンに対して、地域の大人たちはマッシュウやマリラとは異なった厳しい対処をするが、アンはそれを乗り越えて成長している。地域の人々は必ずしも善意に満ちているわけではないが、アンが孤児であることに偏見はもっていない。そしてアンが行動に驚かされ叱りつけたり小言を言ったりするが、結局アンを受入れよい関係になっている。特に牧師館のミセス・アランはアンが憧れのモデルになっており、担任のミス・ステイシーと共に、「その人のようにになりたい」と思うような敬愛できる大人が身近にいたことも、アンが成長を促していると考えられる。

山岸(2008)¹⁸⁾は被虐待児の立ち直りについての検討において、まわりの人からのサポート、近隣・地域の雰囲気、親友ができ親密な交流があったこと、あるいは本人の知的能力や明るく活発な気質、楽観性等をそれを可能にしたものとしてあげているが、以上のことはそれと共通している。またレジリエンス(逆境に遭っても立ち直る力、精神的回復力)の促進要因¹⁹⁾は、子どもの個人的要因・家族要因・近隣や組織の要因に分けてまとめられているが、アンを巡る状況はそれらにあてはまるものが多い[アンが資質、暖かくauthoritativeな(権威のある)養育、教育への関心のある構造化された家庭環境、集団として機能している近隣等]。

但しアンがもつ個人要因の中にはなぜそれをもつことが可能なかわからないものもある。IIIで述べた様に、クスパード家に来た11才の時、既に学業優秀で人の気持ちを引きつける魅力を持ち、よい人間関係を作る力を持っていることに関しては、アンが育ちのどこでそれが可能になるのか、どのような経験を通してアンはその力やスキルを身につけたのかわからない。もともと優れた資質の持ち主だったということはあるだろう。両親とも高校教師であり、知的能力は遺伝的に高いのかもしれないし、明るさや

活動性も生得的な気質で、まわりの人々から暖かく受入れられる潜在能力があったと考えられる。しかし11才までの不利な状況—潜在能力を引き出すような働きかけはなく、肯定的な経験もない状況で、その潜在能力が発現するというのは発達心理学的には無理があるように思われる。モンゴメリの他の作品（「青い城」^{20）}〈注〉）でもそのような傾向が指摘できる。

しかしアンの育ちに関する情報は、全てアンの語りであり（著者は全く語ってない）、必ずしも事実ではないのかもしれない。アンが大げさに、悲劇的に話した可能性は高いし、伝達者の思い違い—アンの思い違いもありうる。あるいは話は事実であっても、話されなかったこと、忘れてしまったこともあるだろう。両親の死後可愛がってくれた人がいたが、それをアンは聞かされていないのかもしれない。トマス夫人の扱いは虐待に近いように読めるが、幼少期はそれなりに可愛がってくれたということも考えられる。

そしてアンが子守りとして大変だったとしても、そこにアンにとってプラスの経験もあったかもしれない。例えば子どもが育てやすい子で—良いフィードバックが返ってきて、子供の相手をする中で楽しさや自己効力感を経験できたということも考えられる。子ども達はトマス夫人よりもアンになつき、アンの言うことだけはきくというように。そしてアンはますます子守りが上達し、楽しいお話をしたり楽しく遊ばすことが得意になり、学校でもそのスキルを使って楽しいことを提案できたのではないか。またアンが想像の翼を広げ、辛いことも想像で乗り切ることにしても、アンは語っていないが、それを教えてくれた人やモデルになった人がいると思われる。つまりアンはIIIで書いた程、否定的な子ども時代をすごしたわけではない可能性がある。

〈注〉「青い城」の主人公は、もの心ついてからずっと誰からも愛されず、まわりを人のいいなりに生きてきた29才の独身女性である。言いたいことも

言わず、楽しいと思うことも全くなく、ただ「植物のように」受動的に生きてきたが、余命僅かと言われたことをきっかけに、言いたいことを言ってまわりを啞然とさせ、自由に生きるために家をでて、自から幸せをつかむ。主人公の立場にたつと痛快な物語だが、急にそのように振る舞うことはむずかしい。それまでしてこなかった行動やもっていない能力は、経験の中で徐々に培っていくものであり、やろうと思っただけですぐ出来る訳ではない[ときにはSST（社会生活技能訓練）のような訓練をして、スキルを習得する必要がある]。

VI. アンの変化とアンがもたらした変化—発達の相互性

「赤毛のアン」の魅力は欠点だらけでしょっちゅう問題を起こすが想像力豊かで前向きなアンの魅力、そして誰からも愛してもらえず愛情に飢えていたアンが様々な出会いや交流によって徐々に成長していくところにあると思われる。しかしこの小説にはもう一つ別の魅力がある。それはアンによってマッシュウとマリラが変わっていくことである。

内気なマッシュウが勇気をだしてお店に行き、やっとアンへのプレゼントを買う。アンの喜ぶ様子を見るマッシュウは、それまでの人生にはなかった喜びや充実感を体験していると思われる。ものの世界に働きかけるだけの人生ではなく、後世代の者を慈しみ励ます喜びのある人生を生きようになる。感情を表したり笑ったりしない非情緒な堅物のマリラも、アンの言動に接している内に思わず笑ってしまう（その声を聞いたマッシュウがびっくりしている）。そしてアンの世話をしていく内に、マリラの中に今までに経験しなかったような気持ちが芽生えてくる。「身内の暖まるような快いものがわき上がった」と書かれているが、思いがけずマリラはアンによって母性を引き出されるのである。アンが愛着対象や基本的信

頼を得ると同時に、成人期の生殖性課題を担っていなかった老兄妹もその対象を得て、豊かな自我発達をもたらされている。それは自らの発達課題の達成と相手の発達課題の達成が繋がっていること、「一方は他方を照らし、暖め、その結果として、他方もはじめ与えてくれた人に熱を返す」²¹⁾というエリクソンの「相互性」の例といえる。

発達の相互性はエリクソンの自我発達理論の中核にある概念であり(1964年の論文²¹⁾で明確に詳述されている)、現代の発達心理学においても重要な概念であるが、モンゴメリは相互性を経験することから切り離されていた者が、どのようにして相互性の中に組み込まれていくのか、それが可能になっていく過程やその喜びを生き生きと豊かに描いている。

但し、愛着関係に問題がある育ちをした者は、対人関係をうまく持てず、養育者が暖かく適切に働きかけてもそれを肯定的に受けとめ応じることが出来ないという問題を抱えていることが多いにもかかわらず、アンは前述のように肯定的な対人関係を持つことができ、相互性を経験する土台ができていて、速やかに回復している。幼少期の愛着形成において問題があった少女の成長物語である「赤毛のアン」の魅力と限界がそこにあると考えられる。

VII. おわりに

「赤毛のアン」は、幼少期に孤児となり誰からも愛されたことがなかったアンが、クスパート家に来た11才から高校を卒業するまでの物語である。クスパート家に来るまでのアンの子育て、クスパート家に来た当初のアンの様子、その後のアンの変化に関して書かれていることについて、発達心理学の観点から考察を行った。アンは愛着対象をもったことがなく、その育ちは愛着障害を引き起こすようなものであったが、「拡散された愛着」に該当するような行動や関連する行動的・心理的傾向がいくらか見られたが、「回避性」

の問題は見られない。アンはマリラとマッシュウから暖かい養育を受け、安定感や安全感を与えられ、一方でしっかりしたしつけを受け、期待・応援される中で、心豊かに成長していく。またダイアナとの親密な親友関係や、学校の仲間、近隣の人々との交流も発達に寄与している。そしてアンの変化とともにマリラとマッシュウも変わっていくという発達の相互性も豊かに描かれている。アンが当初からもっていた対人的能力や学業上の能力に関しては、語られた育ち方では少々無理があるが、クスパート家そしてアボンリーで生活する中でのアンの変化に関しては、発達心理学の見解と一致するものであることが示された。

引用文献

- 1) Montgomery, L.M. : Anne of green gables, 1908, 村岡花子訳、赤毛のアン 新潮社、東京、1952 / 2008.
- 2) 小倉千加子：「赤毛のアン」の秘密 岩波書店、東京、2004.
- 3) 毎日新聞社：読書世論調査 2010-2014 年度版、毎日新聞社、東京、2010-2014.
- 4) 佐藤義隆：「赤毛のアン」の魅力を探る、岐阜女子大学紀要、39、87-105、2010.
- 5) 斎藤美奈子：「少女小説」の使用法、文学界、6月号、246-274、2001.
- 6) 藤井佳子：なぜ孤児物語なのかー日本で読まれる英語圏の少女小説ー、奈良女子大学文学部研究教育年報、6、23-28、2009.
- 7) 山下景子：モンゴメリと少女孤児物語、Evergreen、33、51-90、2011.
- 8) 川端有子：少女小説から世界がみえる 河出書房新社、東京、2006.
- 9) Twain, M. 前掲書 1) のあとがき (P.525) による。
- 10) van den Berg, J.H. : Dubious maternal affection, 1972、安達叡・田中一彦訳、疑わしき母性愛ー

- 子どもの性格形成と母子関係 川島書房、東京、1977.
- 11) Bowlby, J. : A secure base : Clinical applications of attachment theory, 1988、二木武監訳、母と子のアタッチメントー心の安全基地 医歯薬出版株式会社、東京、1993.
- 12) Erikson, E. H. : Childhood and society. Norton, 1950、仁科弥生訳、幼児期と社会 みすず書房、東京、1977.
- 13) Chisholm, K. : A three year follow-up of attachment and indiscriminate friendliness in children adopted from Romanian orphanages. Child Development, 69, 1092-1106, 1998.
- 14) 遠藤利彦：アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する、数井みゆき・遠藤利彦編 アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房、京都、1-58、2007.
- 15) 青木豊：アタッチメント障害の診断と治療、庄司順一・奥山真紀子・久保田まり編著 アタッチメント：子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐる 明石書店、東京、122-142、2008.
- 16) Gilien, M. : Lucy Maud Montgomery, 1978、中村妙子訳、赤毛のアンの世界ー作者モンゴメリの生きた日々 新潮社、東京、1986.
- 17) Sullivan, H.S. : The interpersonal theory of psychiatry. Norton, 1953、中井久夫他訳、精神医学は対人関係論である みすず書房、東京、1990.
- 18) 山岸明子：なぜ Dave Pelzer は立ち直ったのかー被虐待児の生育史の分析、医療看護研究、4、59-101、2007.
- 19) Masten, A. S., Cutuli, J.J., Herbers, L.E., & Reed, M.G. : Resilience in development, Lopez, S., & Snyder, C.R. (Eds.) Oxford Handbook of Positive Psychology, Second Edition, Oxford Univ. Press, 117-131, 2009.
- 20) Montgomery, L.M. : The blue castle, 1926、谷口由美子訳、青い城 角川、2009.
- 21) Erikson, E.H. : Insight and responsibility, Norton, 1964、鑪幹八郎訳、洞察と責任 誠信書房、東京、1971.